



特集 フィリピンろう者社会の動向

フィリピン手話：過去を理解し、未来を展望する

リーザ・B・マルティネス

フィリピンのろう社会のあけぼの 森 壮也

他

寄稿

シンガポールのろう者と手話

加藤三保子(豊橋技術科学大学)・本名信行(青山学院大学)

# Contents

Special Issue : The Movements of Deaf People and their Community in Philippine

- 
- Osugi, Yutaka 1 About this Issue (Foreword)
- Liza B. Martinez, PhD 2 Filipino Sign Language:  
Understanding The Past and Looking To The Future
- MORI, Soya 12 The Dawn of the Philippine Deaf Community  
— The Early Years of Deaf Education for the Deaf  
in the Philippines
- Theresa Christine Benitez-dela Torre, 22 Higher Education for Deaf Students in the Philippines Today:  
James DeCaro, and Bill Clymer The Role of De LaSalle-College of Saint Benilde, the Deaf  
Community, and PEN-International

---

HISAMATSU, Mitsuji 54 Ensuring Linguistically Fill Participation  
and Equality of the Deaf

---

KATO, Mihoko 59 Deaf People and Their Sign Language in Singapore  
HONNA, Nobuyuki

---

SANO, Masanobu 34 *Koto-no-ha Mimi-no-ha* (3)  
— A Deaf Translator's Essay

TAKADA, Eiichi 38 Secrets of Sign Language(23)

KAMEI, Nobutaka 45 The Deaf in Africa(9)  
— Teacher training by the Deaf

67 JISLS NEWS

---

Published by  
Japan Institute for Sign Language Studies

Tokyo Office ; c/o S.K.Bldg., 130 Yamabuki-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0801 Japan  
Phone: 81-3-3268-8847 FAX ; 81-3-3267-3445

Kyoto Office ; c/o Sen-i Kaikan, Imadegawa-sagaru, Muromachi-dori Kamigyô-ku, Kyoto 602-0901 Japan  
Phone: 81-75-441-6079 FAX ; 81-75-441-6147

# 今日のフィリピンにおける ろう学生の高等教育

## —デラサール大学セントベニルデ校、ろう社会、及び PENインターナショナルのそれぞれの役割

テレサ・クリスティン・ベニテズ・デラトーレ（講演者）、  
ジェイムズ・デカーロ、ビル・クライマー

Theresa Christine "Techie" Benitez Dela Torre  
デラサール大学修士課程ガイダンス・カウンセリング専攻卒業。教育学修士。学部では、心理学と中等教育の学位を取得。1990-1991年にデラサール大学セントベニルデ(DLS-CSB)のガイダンス・カウンセリングセンターで聞こえる学生のためのカウンセラーに就任。1998-2000年には、同センターにて、ろう学生の自己形成のためのカウンセラーを務めた後、ろう学生のためのカウンセリング・リソース部のコーディネーターを務め、2000年からは、DLS-CSBのろう教育・応用学部の学部長として、フィリピンのろう教育の発展に貢献している。

本日このような機会をいただき、私どもの大学、私どもの学部内のろう者や健聴者、また大学を取り巻くろう者集団、及びPENインターナショナルが、ろう青年と共に、またろう青年のために絶え間ない取り組みを続けて来た経験をお話できることを、大変光栄に思います。私がお話することが、日本のろう学生の高等教育を、さらに彼らの人生にとって意義あるものにしていく上で、お役に立てれば幸いです。

デラサール大学セントベニルデ校 (De La Salle—College of Saint Benilde=DLS-CSB) においてろう学生のための高等教育を推進する際の基盤としてきた次の三つの点についてお話します。

1. デラサール大学セントベニルデ校の役割
2. デラサール大学セントベニルデ校外のろう社会の役割
3. フィリピンの高等教育の未来のためのセントベニルデ校とPENインターナショナルのパートナーシップ

この原稿は、2005年3月27日、早稲田大学（東京）で行われた「障害学生の高等教育国際会議」の聴覚障害分科会における基調講演の内容を全日本ろうあ連盟事務局で翻訳、本誌掲載のために編集したものです。

### 背景

最初にデラサール大学セントベニルデ校が属する教育組織の背景についてご説明します。様々な組織との関係は、資料をご覧いただけましたらさらに詳しく書いてあります (PENインターナショナルのサイト <http://www.pen.nitd.rit.edu/japaneseindex.php> を参照)。

デラサール大学セントベニルデ校は、フィリピンのラサール管区内の63の学校のひとつです。ラサール修道会は、フランスで結成されたキリスト教の修道会で、現在この修道会が運営するラサール管区は世界の61箇所にあります。ラサール修道士達は貧しい子供の教育をその任務としています。このラサール管区内の63の学校のうち、セントベニルデ校のほか七つの学校がデラサール大学に属しています。これらの学校には学士課程、大学院課程、研究課程があり、あらゆるレベルの教育に対応しています。それ

ぞれの学校長は大学の副理事長であり、各校の副理事長は理事長への報告義務があります。

一般的に、ラサール修道会の学生達は中流お



講演するデラトーレ氏

よび中流の下の階級の家庭の出身です。しかし、学校の中には、上・中流階級以上の家庭出身の学生だけを対象としているものもあります。セントベニルデ校はそのような学校のひとつです。しかしながら、そのような学校でも貧しい学生が教育を受けることを可能にしています。高額の学費が支払えない学生に対しては、学費の一部または全額が支給されます。それらの助成金は大学の一般予算および外部からの寄付によって賄われています。セントベニルデ校のろう教育・応用学部（以下、SDEAS）のろうの学生達の90%はそのような助成を受けています。

デラサール大学セントベニルデ校には現在7,363人の学生が在籍しており、そのうち133名がろう者です。これらのろうの学生はSDEASに在籍しています。SDEASは、セントベニルデ校の学務担当副理事長が担当する六つの学校のひとつです。デラサール大学の学務局のなかには「学生支援センター」(Office of Student Affairs)があります。このセンターは、授業以外のことで、学生生活にとって重要な問題を担当します。授業以外の重要な問題とは、心理カウンセリング、専門性の開発及び就職支援、精神面の育成、文化・芸術、スポーツ、学生自治と学生組織、リーダーシップ及び地域サービスの研修などです。

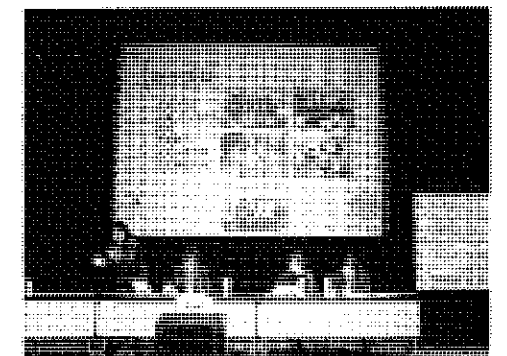
SDEASの中にも、学業に関するニーズに応える「学務センター」(Office for Academic Programs)と、その他学生生活全般のニーズに応えるための「ろう者の尊重と育成センター」があります。SDEASのこの二つのセンターは、ろう者と健聴者の学生の関係に関しては、上部組織にあたる「学生支援センター」と連携して仕事を進めます。

### 1. 組織としての役割：

#### デラサール大学セントベニルデ校

#### \*歴史的基盤

1800年代にラサール修道会の1人の修道士が、カトリックの教えをろうの男の子に教えました。この修道士は、まずろうの男の子から手話を学び、その手話を使用してカトリックの信仰について教えを説きました。その修道士の名前がベニルデ・ロマンソンでした。後に彼は聖人として認められ、セント・ベニルデと呼ばれるようになりました。歴史を大事にし、この意義ある出来事を継承する意味で、セントベニルデの名に相応しく、ろう者のためのプログラムを発



講演のようす

足させることになりました。

#### \*目標—学ぶ側の立場に立った教育

上記目標は、私達の組織に方向性を与えています。我々が目指す教育は、学ぶ人々の多様なニーズ、志向、文化などを認め、これらの多様

性に対応できるように創造性に富んだ手法を用い、全ての学生の尊厳を認め、互いに支えあうことで成功を促す環境を提供すべきであると考えます。我々は「学ぶ側の視点」から見るようにし、組織として目指すことは、この「視点」がカリキュラム作り、教員育成、政策決定、プログラム開発など、あらゆる場面に反映されることです。

#### \*SDEASの改革

「ろうプログラム」は、1991年に職業訓練コースとして発足しました。その後、1993年に、健聴の教育者やろうのリーダー達の間で、ろう教育・応用学の学士課程の設立が検討され始めました。その目的は、ろうとしての社会的、文化的アイデンティティについて精通している、初等教育、中等教育のろう教師を育成することでした。

1994年に特殊学部が開校し、二つのプログラムを提供し始めました。この学部はその後さらに拡大され、ろう者の様々なニーズにさらに敏感に対応するようになりました。大きな目標としては、やがて他の障害者も受け入れられるプログラムを開発することでしたが、ろう教育の課題でさえも十分に理解も解決もできておらず、その目標達成は、非常に困難に見えました。学校側は、これ以上の拡大を行う前に、まずはろうの分野で成功を収める必要性を感じていました。

2000年には、ろうの学生、ろうと健聴の教員などと多くの会合がもたれ、学士課程のあり方、教室運営、教職員、学部全体の方針などが、ろうの学生にとってより良い人生を歩む支えになっているかどうかについて検証されました。このような会合での意見から、即座に改善が必要であることがわかりました。まず、学部の名称を「ろう教育・応用学部」(SDEAS)に変更し、学生と教員が持つ信念と目指す方向性を反映するものにしました。

2003年には組織の改革が始まり、現在の二つ

の学生支援センター、すなわち「学務センター」と「ろう者の尊重と育成センター」の骨子が作られました。2004年には組織改革が終了し、学士課程の履修プログラムも改善されました。新しい教育プログラムは、デザインやビジネスの分野において、実際に企業が求める技術の習得に重点をおき、より高い競争力が身につくようにし、リーダーシップも育成し、学生たちが地域社会、もしくは職場において積極的に変革をもたらすリーダーとしての役割を果たせることを目指しました。

変化への鍵は、最高管理責任者たちが、ろうの学生は特有のニーズ、関心、文化をもっており、しばしば健聴の学生に対するのとは異なる指導と支援を必要としていることを理解した事でした。したがって最高管理責任者のろう者の経験に対する理解を促進し、また、ろう学生を教える教育者達がSDEASの主目的と方向性に自分達の努力の方向性を合わせるための間断ない協力関係が重要なのです。

## 2. ろう者達の役割

次に、SDEASの健聴及びろうの教育者達が、常に学生のニーズ、志向、文化に即した教育を行うことを可能にした五つの基本的な信念についてお話しします。これらの信念は、教育者達が適切な策を見つけ、実施し、評価することで、全ての学生が互いに助け合い、互いを尊重しながら目標を達成していくという正しい学習環境を作るように導いてくれました。

この五つの信念とは、次のとおりです：

一ろう者に対する社会文化的なとらえ方

一学習者の立場にたった教育

一新しく生まれ変わり、力を蓄えるための評価とフィードバック

一ろう社会の中のロール・モデル—可能性と方向性を指し示すこと

一橋渡しとなる人々—ろうと健聴の教育者の中の支持者

#### \*ろう者に対する社会文化的な捉え方

初期の頃、健聴の教員は非常に手話が下手でした。講義はかろうじてこなしたものの、ろうの学生たちと効果的にコミュニケーションを行うことはできませんでした。次第に我々の手話が上達するにつれて、ろう者が我々と違っているのは、生活環境と経験の違いに起因する特徴であることがわかりました。彼らは異なっているからと言って、決して劣っているわけではありませんでした。学生たちが私たちの見方の変化に気づき、また私たちの手話が上達するにつれて、彼らはもっと自由に自己表現するようになり、彼らの能力と、未来に向けての可能性が明らかになっていきました。ろう者に関する見方の違いは、初期の頃は医学的／病理学的な見方の影響を反映し、時がたつにつれて、社会文化的な見方をするようになるからであることが後にわかってきました。この後者の見方は、ろう者を経験、信念、言語が違っていても、正当な集団に属する、アイデンティティを持つ人間として認めるもので、道理にかなっていません。しかし、このようなとらえ方は、ろうが機能障害であり、ろう者は「矯正」しなければ社会の中で十分に機能できないという一般的に受け入れられている考え方には反するものでした。

#### \*学習者の立場にたった教育

伝統的な教育において、生徒は単に知識の受け手であり、教師が知識の「源」であると考えられました。知識を開拓し、能力を蓄え、これらをもって他の者の学力を養成するという本来の能力は、年齢、地位、学術的功績によるものであると考えられていました。教師、管理者は主に健聴者であり、権威ある立場の人達でしたので、このような人たちがより高い能力と知識を持っているという考えは容易に受け入れられました。学生、特にろう者は、このような権威ある立場にはおらず、したがってこれらの人たちの知識と能力は、常に教師には劣ると考え



セントベニルデ校の学生たち(写真上・下)



られていました。教師は導き、与える。生徒は待ち、受け取るという図式でした。

しかし、我々の手話が上達するにつれて、ろう者の話、とりわけろうの学生たちに話を懸命に聞くようになりました。我々は、彼らの意見を、より効果的で適切な教育を行うためのガイドラインとして、尊重しました。学生を単に知識の受け手としてみる伝統的な考え方と、ろう者を障害者としてみる医学的な考え方が、我々を伝統的な学習と指導方法に縛り付けていたことに気づきました。様々な状況によって問題が発生しているとは考えず、学生達がろうであるが故に様々な問題が起きるといった考え方を安易に持ち、彼らのニーズを理解するためのより良い方法や選択肢を捜し求める創造性も失っていました。

このように気付くようになり、我々は様々な指導方法を試すようになりました。後に、これは私どもの組織の学習・指導に関する基本的な枠組みとして取り入れられ、「学習者中心の心理学的原則」として支援されるようになりました。その14の原則についてさらにお知りになりたい場合は、<http://www.apa.org/ed/lcp.html> をご

参照下さい。

**\*新しく生まれ変わり、力を蓄えるための評価とフィードバック**

本日私のために日本手話—フィリピン手話(Filipino Sign Language, FSL) 通訳をしてくれているろう者のラフィー・ドミンゴは1990年代の初め頃、私の生徒でした。彼は、これまでの彼の学習経験は指示を待つことだったと私に話してくれました。彼の先輩や後輩と同様に、これをろう者の宿命として受け止めていました。しかし、カウンセリングやその他の課外活動を通して、ラフィーは自分が物事を評価することも、クリエイティブに発想することもでき、自分が直面する問題を「指示待ち」をせずに、自分で解決できることを知りました。

大学での課外活動を通して、学生たちは物事を計画し、評価し、見直す力を身につけます。結果だけではなく、プロセスそのものがメタ認知的活動であり、自分の考える力、創造する力、考えを試す力に気付かせ、自らの考えを具体化するためには、様々な体験から学ぶことの重要性を教えたのです。担当する健聴の教師は、学生たちが自ら掲げた目標の達成に集中し、自らの体験から学ぶように導きました。

ろう学生たちは、手話教室を開き、演劇やダンスのパフォーマンスを行い、地域サービスや学生組織が企画する活動に参加するようになりました。彼らは、新しい企画を生み出すプランナーとなり、カリキュラム改善のアドバイザーとなり、脚本家、パフォーマンス・チーム、地域のまとめ役などにもなりました。さらに、教師、役者、ダンサー、芸術家、リーダーと言った役もこなしました。このような役割を果たすにあたって、特殊な技術をもっていたわけではありません。また、このような技術を極めることを目的とするわけでもありませんでした。彼らは単に、自分達の話をしたかっただけなのです。自分自身の話ですから、当然ベストを尽くし、その自然な結果として、完璧にできたのです。

どのパフォーマンスも「ろうの人生」(デフ・ライフ)と題されていました。このように、自分達の話をして、他の人達の理解を深める取り組みは、やがて「ろう」としての人生を祝福する目的をもつようになりました。現在、このようなパフォーマンスを「デフ・フェスティバル」と呼んでいます。

このような環境は、学生たちに自信をつけました。学生たちは、以前よりはっきりとして目標を持ち、自己主張するようになりました。彼らは、アイデンティティを追い求める後輩達の面倒を見るようになり、ロール・モデルとしての道を歩み始めました。しかし、彼らはまだまだ若く、将来の成功といっても、まだ大学生活における成功しか知りませんでした。

**\*ろう社会の中のロール・モデル—可能性と方向性を指し示すこと**

実際のところ、ろうの学生は真空地帯にいたようなものでした。大学の外のろう者のコミュニティとのつながりがなかったからです。学生達は、学び、理解することで開ける、自信を持って自分達の人生の可能性を模索したり、追及したりすることができるような可能性の幅の証明を求めています。

私たちはろうの専門家を探し、雇い入れました。専門家がない場合には、准専門家を雇いました。雇えない場合には、学生達に会ってもらうようにしました。ろう者のコミュニティの中で尊敬されている、ろう団体の組織者、労働者やリーダー達に呼びかけました。外国のろう者で同じような立場にある人たちも呼んで人生について話をしてもらいました。学生達がそうなりたいと思えるようなロールモデルをたくさん見せたかったからです。

単に可能性があるということを見せるだけではなく、先輩ろう者たちの限界や戦いから理解と勇気を得て欲しいのです。セントベニルデ校の教育があれば、彼らは、次の世代のろう者たちに新たな可能性と実現性を与える先駆者や

パートナーになることができるかも知れません。

**\*橋渡しとなる人々—ろうと健聴の教育者、管理者、サービス提供者の中の支持者**

私たちの教育への直接的な関与はろう者達の生活向上を容易にします。ろう者の自然言語が使える、ろう者の社会文化的アイデンティティを信じている教育者達はすぐにも教室で変化を起こすことができます。しかし変化は私たちが関わり、直接教えているところだけで、起きるべきではありません。教育者達は集団として力を発揮し、当局を変えることができます。大多数にとって利益があるような政策、カリキュラム、教員および教材開発の創設、見直し、実施を通じて、高等教育を受けているろう学生の要請によりよく答えことができるよう、当局に働きかけるべきです。

そして、聞こえる教育者達は、単に自分自身がろう者との橋渡し役となるだけでなく、ろう者のために積極的に橋をかける人であるべきです。運動と啓蒙は変化にとって不可欠な道具です。それを今私たちは確信しています。15年間ろう者の教育、形成、雇用に没頭してきて、私たちはより大きな社会の枠組みのなかでの自分達の役割を見逃してきました。つまり、社会のろう者に対する理解を促進し、またろう者の教育、形成、雇用に直接関係があるかないか、わからないことでも、彼らに直接関与することを勧めることです。この問題に直接関わる事務所として、SDEASに、三つ目の支援センターを設けるべく努力をしています。このセンターは仮に「ろう運動とパートナーシップ開発センター」と呼ばれています。しかし、その制度は完璧ではありません。ろう者の要望や問題解決に対応する支援策を講じている間にも、葛藤を繰り返しています。このような葛藤や妥協は、SDEASとより大きな周りの健聴者社会との間だけでなく、SDEAS内部でも、健聴者の教育者の間、ろう者と健聴者の同僚の間、健聴者の教育者とも



レオンデス・スルセ氏(セントベニルデ校のろう者教員)

うの学生の間、そして一個人としての自分の中にも生じるものです。時として、私たちは誰のためにここにいるのか、また、何のために活動しているのかを忘れてしまいます。

私たちの活動はろうコミュニティ、特に我が校の学生の必要性、独自性、およびその希望にしっかりと根づき、関連したものでなくてはなりません。ろうの青年および大人たちはここで主導権を発揮しなくてはなりません。ろう者が絶えず意見を出し、評価することで、活動の関連性や効果がチェックされ、試され、検証されることになるのです。それにより、教育者たちが自分の責任範囲内で安易に満足してしまうことを防ぐことができます。そのような主体性を高めるひとつの方法は、ろうの成人のロールモデルに積極的に教室に参加してもらうことです。

ホセ・アウストリアは40代初期のろうの男性ですが、1991年の第1期生入学時から参加しています。彼はろう者コミュニティの積極的なリーダーでした。数ヶ月の授業やカウンセリングを受けた後、彼は私たちが教育者としていかに失敗しているか、また、彼の将来がいかに暗いかにについて不満を述べました。しかし彼の率直さは、もし私たちがろう者から手話を学んで、ろう者の意見を聞くことができるようになれば、自分自身や彼の後輩達の夢がまだ実現可能であるという楽観的な希望も物語っていたのです。このような率直さが組織の任務を学習者中

心の、より現実的で緊迫感のあるものにします。それによって、私達は学生達をよりよく教育するために、学生たちの言うことを聞くようになるのです。

ろうの成人が教師、アドバイザー、また教育現場における同僚となり、ろうの学生や聞こえる同僚達と自由に交流し、これらろう成人の考えがろう教育における政策、プログラム、指導として実現できたら、それは大変意義深いことです。セントベニルデ校では、我々と共に働く人としてろう者を雇いました。いくつかの足りない部分を補うために、わずかの新人教育と指導を行いました。健聴者の教育者たちもろうの教師達から同じことをしてもらっています。本当に橋をかける人であるためには、職務の内容だけに集中しているわけにはいきません。人間関係を構築しなくてはなりません。情報や介入を議論するだけでなく、本物の会話がろう者のニーズや課題、さらに彼らの独自性や願望をつねに把握しておく助けとなるのです。そして、このようにろう者のことを常に把握することで、私たちがろう者のために働き、ろう者と共に働く上で、なぜ橋をかける人間にならなくてはならないかという、その責務が明確に保てるはずで

### 3. 今後の役割：

デラサル大学セントベニルデ校 (DLS-CSB) とPENインターナショナルのパートナーシップ

次に、セントベニルデ校とPENインターナショナルのパートナーシップについて、次の3点からご説明いたします。

- PENインターナショナル、日本財団、国立ろう工科大学 (NTID)
- DLS-CSB SDEASの取り組みにおけるPENインターナショナルの役割
- 今後の方針

セントベニルデ校は、フィリピン国内で、先駆的役割を果たしてきました。それは、私たちが信念に従って、創造的な試みにチャレンジしてきたからです。セントベニルデ校は、この10年間、さまざまなことを試み、試練や失敗にぶつかりながらも、成功への道を歩んできました。けれども、誤った判断から残念な結果に終わってしまったこともあります。2000年に、ろうと健聴の教員がろうの学生とじっくりと話し合う機会を持ち、私たちは、これまでのセントベニルデ校の歩みについて、こうした結論を導きました。このことから、私たちは失敗のリスクを減らし、自分たちの努力の成果を正確に把握するための指針や方法が必要であると考えようになりました。セントベニルデ校は、私たちが導いてくれるロールモデルとしての教育機関および専門家を必要としていたのです。

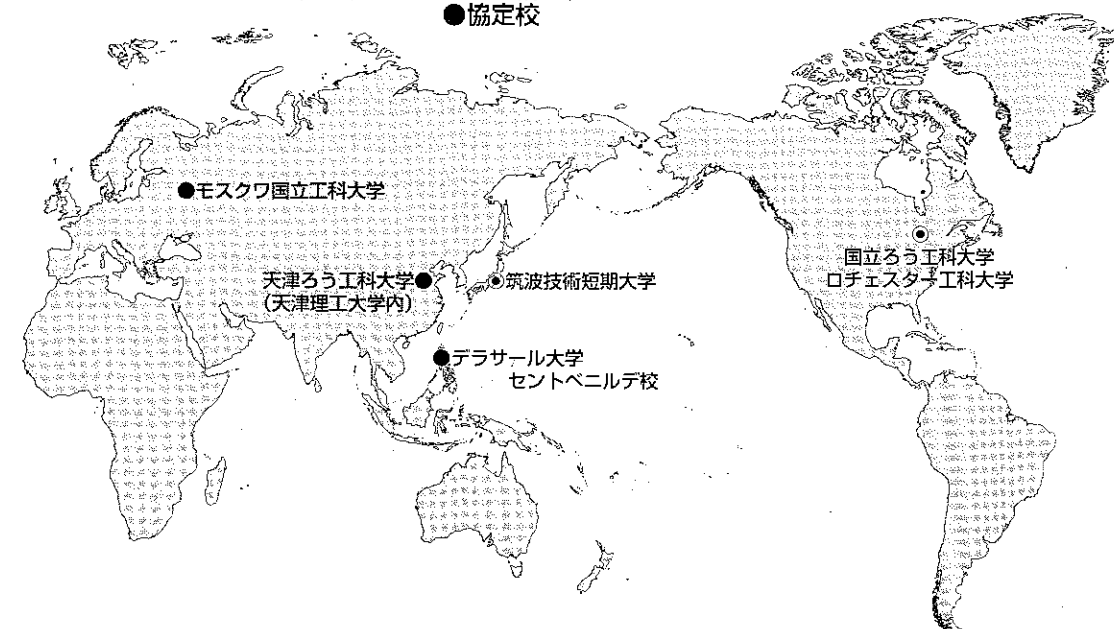
高等教育ネットワーク・インターナショナル (PENインターナショナル) の理事長であるジェームス・デカロ博士から、セントベニルデ校にEメールが届いたのは、ちょうどそんなときのことでした。その後、1年にわたる話し合いを経て、2001年の終わりに、PENインターナショナルのデカロ博士、PENインターナショナル・プロジェクトのコーディネーターであるビル・クライマー教授、NTIDの学長であるロバート・ダビラ博士が我々の大学を視察に訪れました。セントベニルデ校がPENインターナショナルのパートナーとなるのにふさわしいかどうかを評価するためです。その直後、日本財団の石井安信氏が大学を訪れ、2002年1月、DLS-CSBは、PENインターナショナルの協定校として迎えらるることになりました。

PENインターナショナル、日本財団、国立ろう工科大学 (NTID)

PENインターナショナルの本部は、アメリカのロチェスター工科大学 (以下、RIT) の国立ろう工科大学 (以下、NTID) にあります。2001年からNTIDは、日本財団からPENインターナシ

### PENインターナショナル協定校

●主要協定校  
●協定校



ナルの活動を支えるために5百万ドルの助成金を受けています。

NTIDは、RITの中にある8つの学校の一つです。RITは、1829年に設立され、国際的に有名な工科大学へと発展してきました。RITには、約1万5,000人の学生が在学し、ろうの学生は1,250人です。NTIDは、PENインターナショナルの本部としての役割を果たしています。

日本財団は、日本にある支援団体で、世界各国の人々の生活を向上させるのに役立つと思われるさまざまな活動に経済的な支援を行っています。

日本財団は、発展途上国出身のろうや難聴の学生がアメリカに留学するために多くの支援を行ってきましたが、こうした支援を受けられるろうや難聴者は一握りにすぎないことに気がつきました。発展途上国のほとんどのろうや難聴者は、母国で十分な高等教育を受けることさえできないのです。日本財団は、ろうや難聴の学生が自国で質の高い教育を受けることができるよう支援する枠組みが必要だと考えました。日本財団は、ろうや難聴の学生の高等教育を向上

させるための国際的なネットワークづくりというNTIDの提案に目をとめ、PENインターナショナルへの助成を決定しました。

ロシア、日本、中国の大学の代表団とNTID/RITは、各国のろう者の高度なテクノロジー教育、職業選択の向上のために、革新的で傑出した、独自の協力ネットワークづくりをすすめていくという決議に調印しました。2001年6月29日の調印式をもって、PENインターナショナルは正式に発足しました。セントベニルデ校がPENインターナショナルに加盟したのは、その翌年のことです。

上図からおわかりいただけるように、世界各国にPENインターナショナルの拠点があり、その多くはアジア太平洋地域にあります。

PENインターナショナルが目指しているもの、それは  
—教授法・学習方法・カリキュラム開発の改善  
—指導および学習における更なるテクノロジーの活用  
—世界各国のろう・難聴者の職業教育の機会の拡充です。

## DLS-CSB におけるPENインターナショナルの役割

私たちがろうの学生のニーズを理解するときには時間がかかるものですが、PENインターナショナルもまた、ゆっくりと時間をかけて私たちのニーズを理解してくれました。公式・非公式の話し合いや訪問をとおして、私たちは核となる課題を明確にし、可能な解決策を明らかにすることができました。その後も継続的に話し合いの機会をもち、これらの問題について話し合いを重ねました。

また、PENインターナショナルは、研修や教員能力開発、マルチメディア・コンピュータ・センター、オンラインやホームページのリソース、評価と研究などの分野で、私たちに多くの機会を与えてくれました。

SDEASは、ろうの学生にとって、自らの生活を向上させ、社会に貢献する機会を得るために、もっている能力を伸ばし、平等に競い合うために必要な支援を受けることができる最後の場所だということが、私たちにわかっていました。私たちに、SDEASに必要なことを早急に学び、可能な改革をすぐに実施する必要性があったのです。

教育の世界や職場、社会でろう者の権利擁護を行うのが困難だということは、承知していました。けれども、私たちに、私たちの信念を裏付ける理念と概念的な枠組みがありました。また教師一人一人の献身的な取り組みや、問題に取り組む専門的な能力がありました。共に励むろうの仲間もいました。彼らの経験談や抱負を聞くことで、私たちは改革の必要性を痛感しました。けれども、私たちはこうした思いを、フィリピンろう者の生活向上に貢献できるような具体的な行動に結びつけるための指針も方法ももっていなかったのです。

SDEASの発展には、研修と教員能力開発、マルチメディア学習センター、私たちの絶え間ない相談に対する根気強いサポート、専門家からのフィードバックが重要でした。そしていくつ

かの大きな出来事をきっかけに、私たちは自分たちが探し求めていた指針と方法を見つけることができたのです。その経験から、私たちはより積極的に創造的な試みに取り組むようになり、自信をもって、伝統的な指導法や新しい指導法を導入することができるようになりました。

PENインターナショナルに参加してからの3年間に、いくつもの変革が行われました。それによって私たちは、その経過を検証したり、その後のフォローアップを実施したりすることができる、測定が容易で明確な結果を得ることができるようになりました。こうした結果は、私たちが新たにでてきた課題や問題への取り組みを計画し、実施するときの重要な基準となり、私たちに大きな自信を与えてくれました。

PENインターナショナルからの支援は、セントベニルデ校に次のような成果をもたらしてくれました。

- 専門性とリーダーの養成、スキルの習得に力を入れたカリキュラム
- 習得した技術を、教師の指導の下で、実社会が要求するレベルで試すためのインターンシップ
- 雇用者に、ろうの卒業生の能力を理解してもらうための簡潔で積極的な就職指導の実施
- 職場における健聴の同僚や雇い主の不安を取り除き、ろう者に関する誤解を正すことを目的とした基本的な支援体制、およびろう者の労働者にとって働きやすい環境作りのための適切な配慮の実施
- 地域に存在するろう者のための団体やろう者の団体とのパートナーシップづくり。こうした団体への教育や学習、職業教育や能力開発分野における教員の能力開発やろう者の学生の公共福祉活動の機会の提供

この11年間のセントベニルデ校のろう教育は、学内の健聴者にとっても、ろう社会にとっ

ても困難の連続でした。「セントベニルデ校は特別な存在である」という自意識が、教育的な試みの追求や実施を困難にしました。常に、ニーズの妥当性や取り組みの正当性に疑問が残りました。なぜなら私たちは、無意識のうちに、健聴の学生が享受しているものや健聴の学生の生活や経験と比較しながら、こうした問題を評価しようとしていたからです。

PENインターナショナルからの支援は、セントベニルデ校に多くのすばらしい成果をもたらしてくれましたが、それだけではなく、私たちは4年間にわたるPENインターナショナルとの交わりをとおして、SDEASのこと、ろう者のアイデンティティのこと、ろう者のニーズや希望をきちんと理解することができるようになりました。ろう社会に対して自分たちがどのような責任を担っているのかを、母国も母校もまだ理解できていない中で、陸の孤島のような存在だった一つの学部で、ろう教育界で有名なろう者の大学が運営する国際的な組織が手をさしのべてくれたのです。PENインターナショナルのおかげで、セントベニルデ校は、正当な権利として、自らの意見をのべ、理解を促し、学習者の立場にたった教育理念とろう者の社会文化的アイデンティティに基づいて発展していくという私たちが進むべき道を歩んでいくことができるようになりました。PENインターナショナルによって、ろう者のニーズが裏づけされ、母校において、ひいては母国において先駆的役割を担っていくという私たちの努力が正当化されたのです。

## 4. 今後の展望

セントベニルデ校におけるろう者の高等教育は、今後どのように進んでいくのでしょうか。SDEASでは、これからも次のような重要課題の実現をめざし、自らを発展・向上させていく努力を続けていきます。

カリキュラムにバイリンガル・バイカルチャーの考え方を導入する。この場合、バイリンガルというのは、フィリピン手話と英語・フィリピン語を意味する。バイカルチャーというのは、ろう文化とフィリピン文化のことである。一学生の能力を伸ばし、専門性を身につけさせるためのさまざまな教育プログラムを提供し、学生の社会における活動・職業の選択肢を広げる。

一学生のインターンシップや就職、権利擁護のために雇用主とのパートナーシップを深める取り組みを充実させる。

一手話ができる教育者および大学における手話通訳者を増員する。教員の増員には、ろうの教員の増員を含む。

一教授法および学習法に関する教員の知識・技術を高める。カリキュラムの包括的な編成を促進することができるように教員の方向性を定め、教員の能力を向上させる。

一カリキュラム全体を発展的に改善すると共に、ろう者のニーズを明らかにする機会を増やすために、学生の能力開発の取り組みを充実させる。

一学外のろう学校やろう者のための団体、ろう者の団体が、上記の課題に取り組む際の支援を拡充する。この支援には、サービス提供者に対する支援とサービスを受ける側への支援が含まれる。

SDEASの上位組織であるフィリピンラサール管区やデラサル大学システムの最高管理者は、ろう者のニーズや問題、ろう者の可能性を見つめてきました。また、フィリピンにおけるろう教育の可能性も実感してきました。

ラサール修道会は、すべての可能な教育プログラムに、フィリピンのろうの子供たちや青少年への使命を含めることができます。SDEASは、学校やろうプログラムの運営、教員や手話通訳などの人材の効果的な育成、学習効果を高める指導技術の向上、学生の指導体制の充実、

カリキュラムの選択肢の充実、ろう者のよりよい就職のための架け橋となることを通して、フィリピンのろう教育の発展を支える未来への扉となることを期待されています。綿密な計画をたて、十分な準備をすることで、私たちはこうした大きな夢を実現していきたいと願っています。

セントベニルデ校、ろう者がそれぞれの役割を果たし、PENインターナショナルとのパートナーシップを深めることができれば、私は、セントベニルデは必ずフィリピンのろう教育発展の開拓者となることができると信じています。

最後に、これまで語ってまいりました我々の全ての努力は、ろう者の生活向上を願ってのことです。ここにいらっしゃる皆様も、そして皆様方の組織や団体も既に同じような取り組みをなさっておられるでしょうし、もっと良い方法を模索しておられることでしょう。学校が行う教育が、ろうの学生たちの人生により則したものとするには、ろう者が中心的な役割を果たす必要があることがお分かりいただけたことを願っております。

心を傾けて、より効果的に手話を学びましょう。彼らの言語を用いてコミュニケーションを行うことで、より効果的に彼らを導きましょう。彼らを導くことで、彼ら自身がろうの生活を向上させるためのリーダーとなるでしょう。ろうの人生を変えていく努力をする際に、ろうの大人や学生たちとは、パートナーとして活動しましょう。我々みんながろう者の人生に関わっているのですから。ろうの青年の人生のあり方、ろう社会のあり方を模索する際、ろう者が主役であるのは当然でしょう。

参考文献

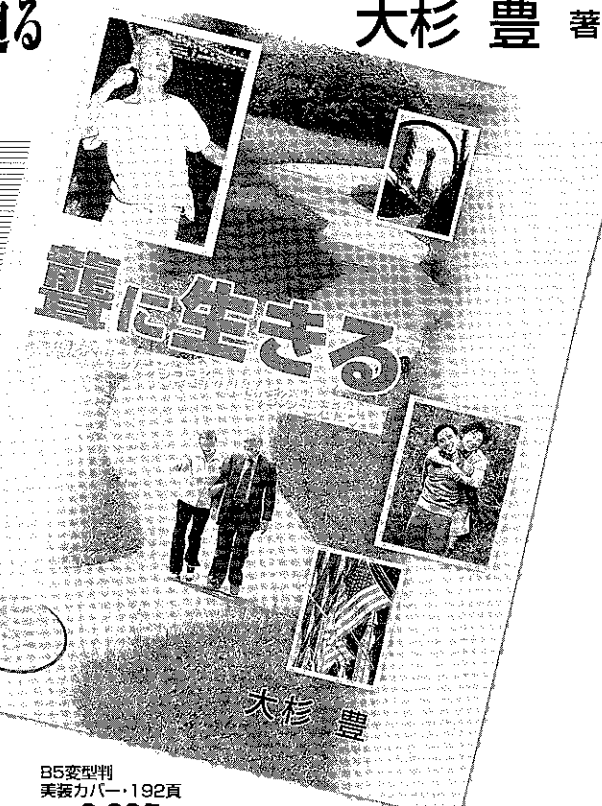
- Corker, M. Counseling - The Deaf Challenge. London: Jessica Kingsley Publishers, 1995.
- De. La Torre, Theresa. Historical Perspective on the Identity, Accomplishments, Concerns and Directions of the School of Deaf Education and Applied Studies. Unpublished Manuscript, DLS-CSB, Manila, Philippines, 2002.
- Facilitating and Monitoring Student Progress Tele-conference with College of Saint Benilde School of Deaf Education and Applied Studies (2002, February 26). Retrieved March 1, 2005, from [http://www.pen.ntid.rit.edu/csb\\_series.php](http://www.pen.ntid.rit.edu/csb_series.php)
- Issues in College Entry Teleconference with College of Saint Benilde School of Deaf Education and Applied Studies (2002, March 12). Retrieved March 1, 2005, from [http://www.pen.ntid.rit.edu/csb\\_series.php](http://www.pen.ntid.rit.edu/csb_series.php)
- Issues in Developing Technology Curriculum Tele-conference with College of Saint Benilde School of Deaf Education and Applied Studies (2002, March 15). Retrieved March 1, 2005, from [http://www.pen.ntid.rit.edu/csb\\_series.php](http://www.pen.ntid.rit.edu/csb_series.php)
- Marschark, M, Lang, Harry, and Albertini, J. Educating Deaf Students From Research to Practice. New York: Oxford University Press, Inc., 2002.
- Padden, Carol. "The Deaf Community and the Culture of Deaf People," American Deaf Culture, S. Wilcox (ed). Silver Spring MD: Linstok Press, 1989.

SigL 手話コミュニケーション双書 第5弾! 待望の新刊!

ろう者の生活観・世界観に迫る  
〈生活史法〉による研究

大杉 豊 著

聾に 海を渡ったろう者  
山地彪の生活史  
聾に生きる



デフファミリーの環境に育った1人のろう者が1966年ろうの妻と2人の子どもを連れてアメリカへ移住した。

何故アメリカに移住したのか?  
日本とアメリカ、ろう者観は?  
アメリカで味わった苦難とは?  
知恵や技術をいかに身につけたか?  
アメリカ社会にいかに適応したか?  
そして、今の生活に満足感はあるのか?

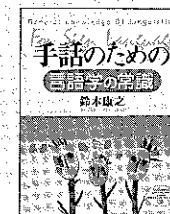
B5変型判  
美装カバー・192頁  
定価 2,625円 (本体2,500円+税)

シリーズ既刊4冊も好評発売中です!

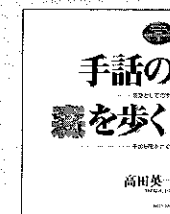
定価各 2,625円 (本体2,500円+税)



実感的手話文法試論  
松本品行



手話のための言語学の常識  
鈴木康之



手話の森を歩く  
高田英一



バイリンガルろう教育の実践  
鳥越隆士/グニラ・クリスターソン

お申し込みは  
都道府県のろうあ団体へ

発行 東京都新宿区山吹町130 SKビル8F  
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445